

古墳壁画の保存活用に関する検討会
装飾古墳ワーキンググループ（第5回）議事要旨

1. 日 時 平成25年6月27日（木）13:30～16:00
2. 場 所 熊本県立装飾古墳館 集団学習室
3. 出席者 （委員）
和田座長、三浦副座長、成瀬委員、矢島委員
（専門委員）
今津委員、岡田委員、小椋委員、高妻委員、坂口委員、柳沢委員
（熊本県教育委員会）
西住文化課長補佐、古城主幹、村崎主幹、岡本主幹
（熊本県立装飾古墳館）
木崎館長、池田参事
（事務局）
文化庁：江崎古墳壁画室長、榎本記念物課長、建石古墳壁画対策調査官、林文化財調査官 ほか
独立行政法人国立文化財機構：
東京文化財研究所 木川保存修復科学センター生物科学研究室長 ほか
奈良文化財研究所 田中研究支援推進部連携推進課長 ほか

4. 概 要

- (1) 開会
(2) 委員及び出席者紹介
(3) 議事

①熊本県の装飾古墳の保存に係る取組について

古城主幹から資料2に基づき熊本県における装飾古墳に関する取組について、坂口委員から資料3に基づき熊本県立装飾古墳館の取組について、池田参事から資料4に基づき熊本県立装飾古墳館が行う石材調査、環境調査について説明を行った後、以下のとおり意見交換等が行われた。

今津委員：装飾古墳を維持するためには、大規模な整備を行うだけでなく、その後も定期的にメンテナンスすることが必要である。

池田参事：熊本県では古墳に異常事態があるのではないかとというときに、その場に駆けつけるということは日常的に行われていると理解している。

和田座長：一度整備・処理した後、10年かそれ以上放置してから改めて整備することは困難であり、恒常的にメンテナンスすることは重要な問題であると思う。

矢島委員：保存科学の観点から、環境条件によっても異なると思うが、強化剤やはっすい剤がどの程度持つものなのかを教えて欲しい。

高妻委員：大きな岩体に強化剤を入れたとしても、ほとんど表層にしか入っていない。はっすい剤の効果もそれほど長持ちしていないのではないと思う。表面が非常に粉状化していて放っておくとぼろぼろになるというときに、ある程度の強化剤を入れることでそれを止めることはできるが、内側と外側で全く物性の違う層を作ってしまうため、将来的に剥離することも念頭に置いて管理する必要がある。

三浦副座長：一般的にモニタリングは温湿度調査や色の変化を見ることを指す。坂口委員のいうモニタリングは保存施設内外の除草や昆虫等の排除が含まれてお

り、非常に大事なことであると思う。古墳内の清掃については観察者や見学者の健康にも留意するという事なので、普通モニタリングは一人で行う場合が多いと思うが、状況によっては複数で行う必要がある場合もあると思う。そのような場合にどのように対応しているか、どれぐらいの頻度で行うのかを教えて欲しい。

池田参事：石室内の温湿度データをとった上で、入室を繰り返したが、いい状態にしたという思いで調査をしていたが、おそらく私一人の体温で濡れの色が発生し、結果的にはカビが発生したと考えている。また、どこの古墳が原因かは分からないが、肺にカビが生える肺真菌症を患ったことがあり、古墳内でメンテナンスすることはよほどの決断が要る。

高妻委員：視察における坂口委員の案内の中で「身の丈にあった整備をする」という言葉が非常に印象に残った。特に遺跡の整備はいったんやってしまうと後戻りができないということがあるので、問題を正確に把握して念頭に入れながらメンテナンスを考えることが大事なのだと思う。

小椋委員：古墳の保存施設を考えた場合に、新しい施設もあれば古い施設もある。そもそも施設がないものもあるという状況下で、当時、施設が作られたときにどういう考え方で、何をするために環境をコントロールしようとしたのかということの位置づけは大事になると思う。それと同時に現代のいろいろな測定技術を用いて環境の形成のメカニズムを把握し、環境と劣化現象の関係というのを詳細に検討していくべきかと思う。

坂口委員：昭和40年代に作られたものの中にはチブサン古墳のように明らかに断熱効果を考えて冷凍室に用いる扉を採用している施設があり、また一方で侵入を防ぐことを目的とした鉄製の柵のような扉もある。それぞれに目的が異なるようだということは把握しており、その施設の特性を考えるためにモニタリングの温湿度データを活用させて欲しいと思っている。江田船山古墳も含めて表土等の盛り土の流出があり、やせたことによって必ず問題が生じる。温度上昇というと入室の影響を考えるが、内側だけではなく日照による外からの熱による影響もある。できるだけ保存科学や環境の専門的な見地から意見をもらうことで、現場の人間が実際に実践して、そこでまたデータをとって検証するという、互いにキャッチボールできるような改修システムを作る必要があると思う。

柳沢委員：公開について、装飾古墳館レプリカ等を見て感じたことは、現地に行かなくても見られるという非常に工夫されたものであるが、チブサン古墳のレプリカに入って感じたのは、中に入ってみなければ分からない部分もあった。また、実物を見たいという欲求に対して実物を見せる場合もあるし、どのような構造になっているか体感したいという欲求に対して、レプリカで体感させる部分もある。装飾古墳について、公開施設に関してだけでなく、レプリカを作っているかどうか、どのように作っているのかもあわせて調査していただきたい。

岡田委員：鍋田横穴の石は、阿蘇山の凝灰の密度に違いのある石ということなので崩落する要素が潜在的にあるのだと思う。史跡の整備については、文化財の保全の場所である一方、人々がそこを散策するために便利ということで、本来その大地が持っていた特徴を無視するようなことが起きているところがあるのではないかと思う。

和田座長：古墳の整備のときの問題点や、課題を克服した部分、新たに生まれてきた課題などについて、ネットワークをうまく作り、それぞれの苦労した部分を共有し、次に整備する際にはその課題を容易に乗り越えることができると思う。保存と活用に絞れば、様々なネットワークの作り方があるのではないかと。

西住課長補佐：熊本県内の市町村でネットワークの整備について検討しているが、財政

的な問題で止まっている。今後様々な問題が出てくると思うので、県の文化課から市町村に呼びかけて機会を作り、共通の理解をしていく努力をしたい。

木崎館長：装飾の一斉公開ということをきっかけに、事前に市町村や県の文化課の担当者と一緒に議論をしながら、ネットワークを展開してきた。保存より活用についての議論が中心になるが、今後どのような方法で行っていけばよいのかという考え方を共有する機会を作りつつ、変えていくことも考えてみたい。

②その他

建石調査官から資料5に基づき、次回のワーキンググループは7月10日及び11日の福岡県下の装飾古墳の現地視察と併せて九州国立博物館で開催されることが報告された。

(4) 閉会

以 上